

旅行記・戦記に見る「ミャンマー（ビルマ）」の風景^①

—18世紀後半～19世紀前半のイギリス人の記述を中心として

渡邊 佳成

はじめに

テインセン政権のもとでようやく「民主化」に踏み切りつつあるミャンマー（ビルマ^②）は、「未知の国」「閉ざされた国」から一躍世界の耳目を集める国に変貌を遂げようとしている。「最後のフロンティア」として経済的に注目されるだけでなく、観光地としても脚光を浴びつつある。政府観光局のサイトなどでは、“Golden Land”をキーとする宣伝が多く見受けられ（図1）、旅行社のパンフレットには、「黄金の国」「微笑みの仏教国」「黄金のパゴダ^③」などを謳うツアーが多く載せられている。

「黄金」「仏教」などで象徴されるミャンマーのイメージはどのように形成されてきたのであろうか。国民の多くが上座部仏教徒であるミャンマーの人々にとっては、それは自明のことであるかもしれない。上座部仏教では仏典の一つでもある『島史 Dīpavārṣa』や『大史 Mahāvārṣa』に述べられているアショーカ王による仏教宣布の話に登場する Suvarṇabhūmī 国（黄金の土地）こそが、ミャンマーであると信じられてきた。そのような自画像がいつ形成されたのかは、今後の検討課題であるが、歴史のある時点で、ミャンマーの仏教徒の多くは、ミャンマーが「黄金の土地」であると意識するようになったことは間違いない（Saw Mra Aung 2011）。

こうした自画像が、他者の思い抱くイメージとしても共有されていくのは、いつのことであろうか。また、共有されることによって、その自画像にも変化が見られたのであろうか。長い歴史の中で、それぞれの時代の自画像と他者の意識、そしてそれらの相互作用について検討していくことが必要であるが、ここでは、まず、比較的多くの史料が残されている近代に焦点を当てて考えていくことから着手してみたい。

本稿では、そのためのまず第一歩として、近世から近代への移行期にあたる18世紀後半から19世紀前半の時期に、コンバウン朝ビルマ（1752-1885）と初めて深く関わるようになったイギリス人がどのようなイメージを抱き、欧米諸国にも広がっていったのかを、公刊された旅行記、戦記に掲載された挿絵を見ることによって、考えていきたい。

ここで挿絵に注目するのは、イギリス人のビルマ像についての研究がこれまで主として文字史料の内容の分析にもとづいて行われてきた^④からであり、それに対して図像史料を用いることにより新たな視

① 本稿で用いる「風景」とは、「民族の魂と祖国の美を描き出すく風景画」や、それぞれの時代の自然・社会の景観や人々の生活風俗など具体的なものから、「心象風景」や「時代精神の風景」といった内面の風景までを含む（土屋 1991 参照）用語として用いる。

② 本稿では、主として18-19世紀のイギリス人が見た“Burma”について検討を加えるので、ミャンマーではなく歴史的名辞として「ビルマ」を用いることとする。

③ 仏塔。白い漆喰を施し、その上に信者の寄進した金箔を貼っているものも多い。

④ こうした研究自体、さほど多くないが、宣教師の見たビルマについての Trager 1966、イギリス使節の見たコンバウン朝宮廷についての坪内 1980、坪内 1984 など参照。

角を提供できると考えたからである^⑤。図像史料としては、「印刷され」本の挿絵として使用されたもの以外にも、当時描かれた絵画が多く存在するはずであるが、それらについての研究はほとんど進んでおらず^⑥、また、ビルマ像がいかに形成され人口に膚炙していったかを検討する本稿の目的からはやや外れる史料もあるので、ここでは、より広く読まれ人々のイメージ形成に大きな役割を果たしたであろう本の挿絵に注目してみたい。

また、19世紀半ば以降には、*The Illustrated London News* (1842年5月14日26,000部で創刊、1年後には6万部、1850年代には20万部) や *The Graphic* (1869年12月4日創刊) などの絵入り新聞が発行され、それまでの旅行記や戦記とは異なる形で、ビルマ像の形成に大きな役割を果たした。さらに19世紀末に近づくと、写真図版も掲載されるようになり、挿絵とは異なる性格の図像史料が登場してくるので、本稿では、検討の時期を19世紀前半までに限定することとする。

1. イギリス人使節の見たビルマ

インドに進出していたイギリス東インド会社がまだほとんどビルマと接触を持っていなかった18世紀前半におけるビルマ像はいかなるものであったろうか。インド、東南アジアへの航海の経験があり、歴史学者、地理学者として有名な Thomas Salmon (1679-1767) の世界地理書を見てみたい。サルモンの『現代の歴史』は、1727年に出版されるや何度も版を重ねただけでなく、すぐに、オランダ語、イタリア語、ドイツ語などに翻訳され、ヨーロッパに広がっていった (Salmon 1727; Salmon (van Goch) 1729-1820; Salmon 1738 (1734); Salmon (van Goch) 1735-1736)。当時、ヨーロッパがいかに世界の情報を求めていたかがわかる。

本書には以下のような3点の銅版画が附せられている^⑦。

Salmon 1738 (1734)_0 IV 14: Ratto d'una Sposa Peguana fatto da un Portoghes (ポルトガル人によるペグー人花嫁の強奪) (図2)

Salmon 1738 (1734)_ IV 022: Tempio di Kiakiak, ed il modo nel quale va vestito il Popolo del Pegu (Kiakiakの寺院とペグー人^⑧とその服装) (図3)

Salmon 1738 (1734)_ IV 042: Il modo nel quale Si vestono gli abitanti di Arakan (アラカン人とその服装) (図4)

挿絵の前後の本文の記述、挿絵自体の題材から見て明らかのように、ここで示されているのは、同時代のビルマの情報というより、「交易の時代」(15-17世紀)に栄えたビルマ西海岸アラカンのムラウー

^⑤ 大航海時代 (16-17世紀) のヨーロッパのアジア記述を分析した大著 Lach 1965-1993 では、図像史料も一部利用されている。ビルマについては、19世紀末~20世紀初頭の時期についての研究になるが、図像、写真史料なども用いた Keck 2004 が参考になる。

^⑥ イギリス人が描いたインドについては、Archer & Lightbown 1982、絵画の目録については、Archer (Kattenhom) 1969-1994 があり、ビルマを描いた絵画も若干紹介されている。また、イギリスの影響を受けて描かれたインドの人々によるインドの絵画については、Archer 1992 参照。

^⑦ 図版については、筆者の手もとにあるイタリア語版第2版を使用した。これらが英語版のものと同じであるかは確認できていない。

^⑧ 18、19世紀のイギリスなどの西洋諸国のミャンマーに対する呼称は、Burmah, Birma など今日の Burma につながるものだけでなく、コンバウン朝の都が置かれた Ava (Inwa) や 15-16世紀前半に栄えたタウングー朝の都が置かれた Pegu を用いることも多かった。

王国、南海岸に位置し貿易で繁栄したペグー王国、第1次タウンジー王国時代についての、大航海時代の16-17世紀のヨーロッパで流通していた情報に依拠している可能性が高い^⑨。

後に見る18世紀後半以降の挿絵と比べても、人物像の相貌、体躯はヨーロッパ風であるし、その服装も本来のものとは異なり、どちらかと言えば西洋風となっている。図2の象や高床式の住居はそれほどではないが、後に多く描かれる仏塔は、単純な円錐形になっているし、本来内部空間を持たない建造物であるにもかかわらず、そこから人が出てくる様子が描かれるなど、少し正確さを欠いている。

18世紀後半になると、インドにおける英仏抗争の激化にともなって、ベンガル湾の海上霸権を獲得するためにビルマの海岸部は、イギリスにとって戦略的に非常に重要な位置を占めるようになる。さらにコンバウン朝ビルマが勢力を西に拡大していくなかで、様々な紛争の種が生じた結果、イギリス東インド会社はたびたび使節をビルマの宮廷に派遣し^⑩、それにともなってビルマに関する情報は飛躍的に増えていくことになる。

こうした情報は、フランスとの敵対関係の中では秘密性が重要視され、東印度会社もしくはイギリス本国政府の中にのみとどまっていたが、後に記録の一部は公刊され、それが版を重ね、また、他の国の言語に翻訳されていくことによって、ビルマに関するイメージがヨーロッパの中で共有されていったものと思われる。

ただ、当初は文章のみによる情報が主であり、それ以外では、おそらく最も重視されたであろう地図情報が図像として附されるのみであった。それは、ビルマに限らず東南アジアの様々な情報を盛り込んだ Dalrymple 1808 (1791-1797)^⑪、出版後すぐにドイツ語、フランス語に翻訳されたことから他に類書がなく重視されたことがわかる Hunter 1785^⑫、東洋学者としても有名なフランクリンによる Franklin 1811^⑬などを見ても明らかである。それらは、東印度会社の社員、雇員としての経験を踏まえて、貴重な情報を提供してくれているが、詳細な地図が附されることはあっても、ビルマについて具体的な図像を提供しているわけではない。

それに対して、これらの刊行物や東印度会社内の記録文書を涉獵し、コンバウン朝宮廷との具体的な交渉に臨んだサイムズ Michael Symes (1761-1809)は、交渉についての報告にとどまらず、彼自身の体験に基づいた詳細な情報を提供しているだけでなく、以下のように大量の図版をその旅行記に載せている (Symes 1969 (1800))。したがって、その旅行記は、イギリスで版を重ねただけでなく、フランス、ドイツ語、オランダ語、スウェーデン語、イタリア語にも翻訳され (Symes (Castéra) 2002 (1800); Symes (Hager) 1801; Symes 1800-1804; Symes (Ödmann) 1805; Symes (Carozzi) 1832 (1819))、そこで示されたコンバウン朝の情報は、広くヨーロッパに行き渡ったものと思われる。

Symes 1969 (1800)_186: Shoemadoo, the great Temple at Pegue, and the Ground Plan (図5)

⑨ これら図版が何に依拠したものであるのかは、今後の課題としたい。

⑩ 18世紀後半から19世紀前半における両国の関係については、渡辺 2003; Woodman 1962; Ramachandra 1977など参照。

⑪ イギリス東印度会社の書記としてマドラスに駐在し東印度、中国との貿易の拡張に尽力し、後にイギリス海軍の水路局長官として活躍した Alexander Dalrymple (1737-1808)による、東南アジア、中国への旅行記集成。

⑫ 1781年より1812年まで東印度会社の医務官としてインド～東南アジア各地で活躍した William Hunter (1755-1812)は、1782-1783の体験をもとに本書を完成出版したが、挿絵はもとより地図も含まれていない。

⑬ William Franklin (1763-1839)は、1782年より1825年まで東印度会社の士官としてインド各地で勤務、東洋学者としても名声をはせ、勤務で訪れた各地の状況をまとめて多くの著書を出版している。

- Symes 1969 (1800)_210: A Rhahaan, or Priest (図 6)
- Symes 1969 (1800)_248: Impression of the Foot of Gaudma
- Symes 1969 (1800)_298: Image of Boodh at Gaya in Bengal
- Symes 1969 (1800)_308: A Woongee, or Member of the Chief Council, and his Wife, in their Dress of Ceremony (図 7)
- Symes 1969 (1800)_310: An Attawonn and his Wife, and a Seredogee, or Secretary, in their Dress of Ceremony
- Symes 1969 (1800)_312: A Woondock and his Wife, in their Dress of Ceremony
- Symes 1969 (1800)_316: A Birman Peasant and his Wife (図 8)
- Symes 1969 (1800)_318: A Cassay Horseman
- Symes 1969 (1800)_346: Method of catching wild Elephants in Ava (図 9)
- Symes 1969 (1800)_348: Image of the Birman Gaudma in a Temple at Ummerapoora (図 10)
- Symes 1969 (1800)_388: A Kioum, or Monastery (図 11)
- Symes 1969 (1800)_414: View of the Imperial Court at Ummerapoora, and the Ceremony of Introduction (図 12)
- Symes 1969 (1800)_424: Shoepaundogee, or Royal golden Boat (図 13)
- Symes 1969 (1800)_428: A Birman War-boat
- Symes 1969 (1800)_446: A Man and Woman of the Tribe of Mountaineers called Kayn (図 14)

これらの図版以外に、地図 2 点、ビルマ文字の表、植物標本の図版 8 点が附されていて、掲載点数は従来の刊行物よりもかなり増加し、その内容も多岐にわたっている。交渉の当事者であったコンバウン朝政府の高官たちの服装 (図 7 など) やアヴァから移転直後の都アマラーブラの宮殿 (図 12) や僧院 (図 11)、王の御座船 (図 13) などが描かれるのは当然としても、それ以外に、一般の人々 (図 8) や少数民族 (図 14) の風俗も紹介されている。その中でも特に目につくのが、ペグーのシュエーモードー・パゴダ (図 5) などの仏塔や都の寺院、仏像 (図 10) や仏足石、僧侶 (図 6) などの仏教関係の図像である。

後の使節日記のお手本と称される (Herbert 1991: 56-57) この旅行記が、突如として大量の図版を掲載した理由は、詳しく検討する必要があるが、当時の東インド会社が置かれていた立場 (会社の特許法更新を含めた存続意義が問われ始めた時期) と深く関係している可能性が高い^⑩。1795 年のサイムズ使節には、地図測量の専門家や植物学者ハミルトン (Prain 1905)、会社の御用絵師であるベンガル人の Singey Bey なども同行し、ビルマの情報を収集、記録しており、その成果の一部がこの旅行記に反映されていることは間違いないし、その時点でのビルマに関する情報の集大成が刊行されたといつても過言ではない。

したがって、その後何度も派遣された使節については、サイムズの 2 度目の派遣も含めて、旅行記が

^⑩ これより少し以前の 1792-93 年に中国に派遣されたマカートニー使節の日記が、1797 年に刊行され、その後も版を重ねていることとも関連するのかもしれない (Staunton 1797)。

刊行されることはなく、また、刊行されたとしても、図版の数も少なく、その図像の内容もサイムズの旅行記の構成にならう形となっている。

サイムズの交渉により海港ラングーンでの駐在を認められた Captain Hiram Cox (1760-1799)の残した旅行記は、その直後ではなく、後に起こる第1次イギリス＝ビルマ戦争 (1824-1826) の直前に刊行されているが (Cox 1821: Cox 1822; Cox 1825)、そこに附される図版は、

Cox 1821_000: A Woonghee or First Minister's Wife in her Hackery with Female Slave Attendants (図 15)

Cox 1821_014: Chief Sereedoghee (書記官長) (図 16)

Cox 1821_256: A Trooper (図 17)

Cox 1821_304: A Looto Seree (大臣会議書記)

Cox 1821_308: A Nakhan (伝奏官)

となっており、戦争後に派遣された John Crawfurd (1783-1868)の旅行記には、

Crawfurd 1834 2nd vol1_000: The White Elephant^⑩ (図 18)

Crawfurd 1834 2nd vol1_116: Ancient Temple at Pugan (図 19)

Crawfurd 1834 2nd vol1_319: Profile of a Man covered with hair. ---Portrait of a Woman of the Kyen Tribe

Crawfurd 1834 2nd vol1_323: Shwe-Maong, a Native of Lao. --- Infant Child of Shwe-Maong

Crawfurd 1829_228 (Crawfurd 1834 2nd vol1_393): Image of Gautama on his Throne, from a Temple at Sgaing (図 20)

Crawfurd 1834 2nd vol2_000: Image in Gold with precious stones, taken from the Great Pagoda at Rangoon, and imagined to represent the Burman Conqueror Alompra (図 21)

Crawfurd 1834 2nd vol2_001vignettes: A Burman Chapel, or Zayat (図 22)

Crawfurd 1834 2nd vol2_058v: A Modern Burmese Temple at Sagaing (図 23)

Crawfurd 1834 2nd vol2_319v: Household Temple in Silver with an Image of Budd'ha (図 24)

とやや多くの図版と使節の途次に収集された化石の図版 5 点が附されている (Crawfurd 1829; Crawfurd 1834) が、その内容構成に大きな変化は見られない。

すなわち、使節の性格上、交渉相手の政府 (王や高官たち) にかかわる図像 (図 15~17 など) を載せるのは当然だが、それに加えて、ビルマを象徴するものとして仏教に関わる様々な建物、仏像、僧侶などの図像 (図 19~24 など) が多く載せられている。ただ、仏塔を「temple」とするなど、必ずしも正しい情報を伝えてはいない部分もいくつか見られる。かと思うと、描かれる人物の顔立ちが、サイムズの段階では少なくとも東南アジア的ではない容貌であったものが、コックス以降は、アジア的な風貌を持つ人物に変わっているなど、情報量の蓄積をうかがわせるような変化も見られる。

それでは、ビルマに関する情報が飛躍的に増えたであろう、第1次イギリス＝ビルマ戦争 (1824-26) 後のイギリスにおけるビルマのイメージは、大きく変わっていったのであろうか、次に見ていきたい。

^⑩ 白象はビルマに限らず、東南アジアでは王権のシンボルとして用いられ、白象の発見、捕獲は吉兆であり、多くの白象を所有することが偉大な王の資質とされる (Sunait 1990; 土佐 2014 参照)。

2. 戦記のなかのビルマ

東インド会社が行う戦争そのものに反対論も少なからず存在したイギリスでは、戦後に議会で様々な検証が行われただけでなく、戦争の正当性を説くもの (Stewart 1826; Wilson (comp. & ed.) 1827; White 1827) や、戦争に参加した兵士自身による戦記 (Snodgrass 1827; Trant 1827; Havelock 1828; Hofland 1828; Marshall 1830) がロンドン、インドなどで刊行された。その中には、戦闘の様子などを描く挿絵の図版が伴っているものもいくつか見られる。また、戦争の際に描かれたスケッチを銅版画にし、それらを何枚かにまとめた、現在で言うところの大判の「写真集」的なものも出版されたようである (Moore 1825-1826; Kershaw 1831; Cooler 1977) ^⑩。

以下にその主なものを見ていき、それらが提供する図像がどのようなイメージの形成につながっていったのか、検討を加えていきたい。

すべての戦記に挿絵が附せられているわけではないが、Snodgrass 1827、Trant 1827 に以下のような挿絵が附されている。

Snodgrass 1827_Pl001: Meeting of the British and Burmese Commissioners at Neoun-Ben-Zeik; Principal Figure, The Kee-Wongee (図 25)

Snodgrass 1827_Pl002: Bandoola's Look-out Tree at Donoobew – Mounting Four Guns (図 26)

Trant 1827_000: South Eastern Corner of the Stockade at Melloon (図 27)

Snodgrass 1827 の挿絵は、戦闘の様子というより、敵将の様子を描いたもので、基本的には、旅行記で描かれていた交渉相手の図像と大きくは異ならない。これに対して、Trant 1827 の挿絵は相手側の防柵を攻撃する戦争画であるが、そこにビルマ側を象徴するような形でいくつものパゴダが描かれている。パゴダを描いて、ビルマとの戦闘、ビルマ各地の風景を浮き上がらせるという形は、以下の Moore 1825、Kershaw 1830 などの「戦争画」に、より鮮明に見て取れる。

Cooler 1977_Pl.01 (Moore 1825_01): The Harbour of Port Cornwallis, Island of Great Andaman, with the Fleet getting under Weigh for Rangoon. (T. Hunt; 1825.10.1)

Cooler 1977_Pl.02 (Moore 1825_02): View of the Landing at Rangoon of Part of the Combined Forces from Bengal and Madras, under the orders of Sir Archibald Campbell, K.C.B. on 11th May 1824. (H. Pyall; 1825.10.1)

Cooler 1977_Pl.07 (Moore 1825_03): The Principle approach to the Great Dagon Pagoda at Rangoon. (T. Fielding; 1825.11.9) (図 28)

Cooler 1977_Pl.06 (Moore 1825_04): View of the Great Dagon Pagoda at Rangoon and scenery adjacent to the Westward of the Great Road. (H. Pyall; 1825.11.9) (図 29)

Cooler 1977_Pl.09 (Moore 1825_05): Scene upon the Terrace of the Great Dagon Pagoda at Rangoon/ Looking towards the north. (T. Hunt; 1825.10.1) (図 30)

Cooler 1977_Pl.17 (Moore 1825_06): The Attack upon the Stockades near Rangoon by Sir Archibald Campbell, K.C.B. on the 28th of May 1824. (T. Hunt; 1825.11.9)

^⑩ これらの「戦争画集」がどの程度流通していたのか、購買者層はどのような人々であったのか、いわゆる戦記などと比べてイメージ形成にどの程度の影響力があったのかなどについては、未解明で、今後の課題としたい。

- Cooler 1977_Pl.11 (Moore 1825_07): The Gold Temple of the principal Idol Gaudma, taken from its Front/ being the Eastern Face of the Great Dagon Pagoda at Rangoon. (T. Hunt; 1825.10.1) (図 31)
- Cooler 1977_Pl.12 (Moore 1825_08): Inside View of The Gold Temple on the Terrace of the Great Dagon Pagoda at Rangoon. (T. Hunt; 1825.11.9)
- Cooler 1977_Pl.14 (Moore 1825_09): Scene from the Upper Terrace of the Great Dagon Pagoda at Rangoon, to the South East. (H. Pyall; 1826.1.) (図 32)
- Cooler 1977_Pl.18 (Moore 1825_10): The Storming of the Lesser Stockades at Kemmendine near Rangoon on the 10th of June 1824. (T. Hunt; 1826.1.2)
- Cooler 1977_Pl.16 (Moore 1825_11): View of the Lake and part of the Eastern Road from Rangoon, taken from advance of the 7th Madras Native Infantry. (H. Pyall; 1825.11.9) (図 33)
- Cooler 1977_Pl.19 (Moore 1825_12): Rangoon/ The Position of part of the Army previous to attacking the Stockades on the 8th of July 1824. (T. Hunt; 1825.10.1)
- Cooler 1977_Pl.15 (Moore 1825_13): Scene upon the Eastern Road from Rangoon looking towards the South. (T. Hunt; 1825.11.9) (図 34)
- Cooler 1977_Pl.10 (Moore 1825_14): Scene upon the Terrace of the Great Dagon Pagoda at Rangoon, taken near the Great Bell. (T. Hunt; 1826.1.2) (図 35)
- Cooler 1977_Pl.20 (Moore 1825_15): The Storming of one of the principal Stockades on its inside/ on the 8th of July 1824. (T. Hunt; 1825.10.1)
- Cooler 1977_Pl.04 (Moore 1825_16): View of the Great Dagon Pagoda and adjacent [sic] Scenery on the Eastern Road from Rangoon. (T. Fielding; 1825.11.9) (図 36)
- Cooler 1977_Pl.22 (Moore 1825_17): The Conflagration of Dalla, on the Rangoon River. (T. Hunt; 1826.1.2) (図 37)
- Cooler 1977_Pl.21 (Moore 1825_18): The Attack upon the Stockades at Pagoda Point, on the Rangoon River, by Sir Archibald Campbell, K.C.B. 8th July 1824. (Reeve Junr.; 1826.1.2) (図 38)
- Cooler 1977_Pl.03 (Kershaw 1830_01): Rangoon from the Anchorage (図 39)
- Cooler 1977_Pl.13 (Kershaw 1830_02): View from Brigr. McCregh's Pagoda, Rangoon (図 40)
- Cooler 1977_Pl.05 (Kershaw 1830_03): Dagon Pagoda, near Rangoon, taken from the Lines of His Majesty's 13th and 38th Regts (図 41)
- Cooler 1977_Pl.08 (Kershaw 1830_04): Dagon Pagoda, near Rangoon
- Cooler 1977_Pl.25 (Kershaw 1830_05): Prome from the South heights (図 42)
- Cooler 1977_Pl.24 (Kershaw 1830_06): North Face of the Great Pagoda, Prome (図 43)
- Cooler 1977_Pl.26 (Kershaw 1830_07): View from the West Face of the Great Pagoda, Prome
- Cooler 1977_Pl.23 (Kershaw 1830_08): Prome from the heights occupied by His Majesty's 13th Light Infantry (図 44)
- Cooler 1977_Pl.27 (Kershaw 1830_09): Melloon from the British Position (図 45)

Cooler 1977_Pl.28 (Kershaw 1830_10): Pagahm-Mew (図 46)

これらの図像を見てみると、ラングーンの町の象徴とも言えるシュエーダゴン・パゴダ（図 28～31、34～36、41）やプローム（ピイー）のシュエーサンドー・パゴダ（図 43、44）が中心的に描かれるのは当然として、ラングーン（図 32、33、39、40）やダラ（図 37、38）、プローム（図 42、44）、ミールーン（図 45）、パガン（図 46）などの町がパゴダと一緒に描かれる様が明瞭に見て取れる。

こうしたビルマとパゴダ、仏塔の結びつきは、その後の旅行記などの挿絵では、どのように受け継がれていくのであろうか、次に 19 世紀前半に刊行されるようになった、宣教師の記録、旅行記などを見ていこととしたい。

3. 宣教師の見たビルマ

19 世紀に入ると、アジアにおけるキリスト教伝道の動きは、各地における植民地拡大の動きに連動する形で、特にプロテスタント系もしくは聖公会系の各会派の活発な活動によって大きく発展していく。ビルマもその例外ではなく、特にバプテストやメソジスト系の伝道師が多く訪れ、信者を拡大していく。その過程で、より多くの寄付を集め活動を維持拡大していくためにも、布教の様子をより多くの人々に伝えることが必要であった。そのため、雑誌でその活動を報告するだけでなく、多くの旅行記、活動記録が出版されるようになる。

こうした出版を通じた宣伝活動は、19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて活発になっていくが、19 世紀前半にも、その嚆矢ともいえるいくつかの旅行記や活動報告が出版されている。

その代表的なものが、ジャドソン（Adoniram Judson: 1788-1850; 1813 年よりビルマで活動）とバプテスト教会の活動記録である。しかしながら、Judson, Ann 1823, Knowles 1830 (4th ed. --1829), Wayland 1853 などのジャドソン夫妻の活動記録には、挿絵は含まれていない^⑪。

こうした中で、注目に値するのが、ビルマのみならず、東南アジア各地を回り、バプテスト派の活動を記録した Howard Malcom (1799-1879) の旅行記である。この旅行記は、アメリカのみならず、イギリスでも版を重ね、幅広い読者層を有しており、欧米におけるビルマ像の形成に重要な役割を果たしたと思われる (Malcolm 1839; Malcolm 1853 (10th American ed. 1839))。そこでは、文中の小さな挿絵も含めて、以下のような大量の挿絵が附されている^⑫。

Malcom 1853 (1839)_000: View of Tavoy (図 47)

Malcom 1853 (1839)_036v: The Grave of Mrs. Judson

Malcom 1853 (1839)_046: View of Mergui (図 48)

Malcom 1853 (1839)_050v: Boardman's Tomb

Malcom 1853 (1839)_061: View of Maulmain (図 49)

Malcom 1853 (1839)_065: Printing Office at Maulmain

^⑪ 1783 年から 1808 年までビルマで活動したカトリック神父 Sangermano (1758-1819) が体験収集したビルマに関する諸情報をまとめた原稿が英語訳され神父の死後に出版された (Sangermano 1969 (5th ed., 1833)) が、そこにも、挿絵は附されていない。

^⑫ ビルマ以外の挿絵については、ここでは省略する。

Malcom 1853 (1839)_066v: Mr. Judson's House (図 50)
Malcom 1853 (1839)_075v: Ascending the Irrawaddy (図 51)
Malcom 1853 (1839)_086v: Burman Ox Cart
Malcom 1853 (1839)_090v: Burman Gentleman's Carriage (図 52)
Malcom 1853 (1839)_101: View of Sagaing (図 53)
Malcom 1853 (1839)_102v: Burman king's Boat
Malcom 1853 (1839)_108v: A Statue, such as guard the Gate of Burman Temples – Warder, or Balu (図 54)
Malcom 1853 (1839)_118v: New Pagoda at Ava (図 55)
Malcom 1853 (1839)_127v: Jack-Tree and Fruit (図 56)
Malcom 1853 (1839)_128v: Mango
Malcom 1853 (1839)_129v: The Plantain – Tree
Malcom 1853 (1839)_134v: Stand for Eating
Malcom 1853 (1839)_135av: Burman Shoe
Malcom 1853 (1839)_135bv: Burman Lady (図 57)
Malcom 1853 (1839)_138v: Spittoon
Malcom 1853 (1839)_139v: Burman Gentleman and Followers (図 58)
Malcom 1853 (1839)_155av: Beating the Gong
Malcom 1853 (1839)_155bv: Drums
Malcom 1853 (1839)_156v: Burman Lamp
Malcom 1853 (1839)_157v: Assaying Silver (図 59)
Malcom 1853 (1839)_158v: Cleaning Cotton (図 60)
Malcom 1853 (1839)_179v: Irrigating a Rice Field (図 61)
Malcom 1853 (1839)_183v: Gaudama (図 62)
Malcom 1853 (1839)_193v: Burman Zayat (図 63)
Malcom 1853 (1839)_194v: Burman Lion
Malcom 1853 (1839)_195v: Streamer
Malcom 1853 (1839)_196v: Gaudama's Foot
Malcom 1853 (1839)_201v: Priest Walking out
Malcom 1853 (1839)_203v: Priest Preaching
Malcom 1853 (1839)_209v: Burning Ponghee (図 64)

ここに描かれる各都市の景観 (図 47~49、53) は、一見してわかるとおり、パゴダがビルマの「風景」の一部として描かれており、ビルマとパゴダが表裏一体のものとなっている。また、仏像や僧侶など仏教に関わる図像が各処に盛り込まれている (図 55、62~64 など) 点についても、それまでの使節日記の図像構成から大きくかけ離れているわけではない。

しかしその他の挿絵には、キリスト教伝道活動に関わるもの (図 50 など) を別にすると、ビルマの

人々の生活に関わる道具類や生業の様子が簡略な図像ではあるが描かれている（図 51、52、56~61 など）点が、注目に値する。物珍しい風俗や服装の紹介というより、当地の生活に密着した宣教師の経験に根ざした形での、ビルマの生活風俗^⑩が紹介されていると考えていいだろう。

結びにかえて

以上、18世紀後半から19世紀前半に出版された書物の様々な挿絵について検討を加えてきたが、時期が新しくなるにつれてビルマについての情報が蓄積され、その結果「絵」も「キャプション」もより正確さを増していくことは間違いないし、挿絵が附される書物の性格に応じて、その内容にもある種の傾向が見られたことも明らかになった。

すなわち、18世紀末から19世紀前半の使節日記や戦記においては、その交渉、交戦相手についての図像が多く含まれ、戦記には当然のことながら戦闘の場面が描かれ、宣教師の活動記録には、キリスト教伝道の足跡が描かれる。

そうした中で、ほぼすべての書物において、仏教と関連する図像が単独で描かれていることが、注目される。さらに特筆に値するのは、なんども述べてきたことであるが、単独の図像ではなく、ビルマをイメージするある種の「風景」として、パゴダ、仏塔の図像を埋め込むような描写が、1820年代以降に生まれ、定着していくことである。

こうした「パゴダの風景」が、絵入り新聞や写真の登場によって、どのように受け継がれ、また、変化していくのか、そこに「黄金」というイメージが付加されていくのは、いつ、どのようなことが契機になったのであろうか、また、19世紀末から20世紀前半にかけて大量に出版される旅行記や遊記において、「仏教」はどのように位置づけられているのかなどが、次の課題になる。

また、「はじめに」で述べたように、イギリスやヨーロッパの人々のイメージが、ビルマ人の自画像にどのようにフィードバックしていくのか、イギリスの植民地期におけるビルマの人々の意識を図像的に探っていくことが必要になる。後考を期したい。

参考文献

史料

- Cooler, Richard M., 1977, *British Romantic Views of the First Anglo-Burmese War, 1824-1826*, Dekalb: Northern Illinois University. (Moore, Joseph, 1825-1826, *Eighteen Views taken at and near Rangoon*, London: Thos. Clay; Kershaw, James, 1831, *Views in the Burman Empire*, London: Smith, Elder, and Co.)
- Cox, Hiram, 1821, *Journal of A Residence in the Burmhan Empire, and more particularly at the Court of Amarapoorah*, London: John Warren.
- Cox, Hiram, 1822, *Reise in dem Innern des Reichs Burmhan*, Jena.
- Cox, Hiram (A.-P. Chaalons d'Argé), 1825, *Voyage du capitaine Hiram Cox dans l'empire des Birmans*, 2vols, Paris: Arthus Bertrand.
- Crawfurd, John, 2012 (1829), *Journal of an Embassy from the Governor-General of India to the Court of Ava, in the year*

^⑩ ただし、図 54 のように、不可解な図像も依然として含まれている。

- 1827, Cambridge: Cambridge University Press (London: H. Colburn).
- Crawfurd, John, 1834, *Journal of an Embassy from the Governor-General of India to the Court of Ava*, 2vols, London: Published for Henry Colburn.
- Crawfurd, John, 1834 (2nd ed.), *Journal of an Embassy from the Governor General of India to the Court of Ava*, London.
- Dalrymple, Alexander, 1808 (1791-1797), *Oriental Repertory*, 2vols, London: G. Gigg.
- Dalrymple, Alexander, 1926, *Reprint from Dalrymple's Oriental Repertory, 1791-7 of Portions relating to Burma*, Rangoon: Supdt., Government Printing and Stationery.
- Doveton, Capt. F.B., 1852, *Reminiscences of the Burmese War, in 1824-5-6*, London: Allen and Co.
- Francklin, William, 1811, *Tracts, Political, Geographical, and Commercial on the Dominions of Ava, and the North Western Parts of Hindostan*, London: T. Cadell and W. Davies..
- Gouger, Henry, 2003 (1860), *Two Years Imprisonment in Burma (1824-26): A Personal Narrative of Henry Gouger; with an Introduction by Guy Lubeigt*, Bangkok: White Lotus Press.
- Gouger, Henry, 1862 (1860 2d ed.), *A Personal Narrative of Two Years' Imprisonment in Burmah*, London: John Murray.
- Havelock, Henry, 1828, *Memoir of the Three Campaigns of Major-General Sir Archibald Campbell's Army in Ava*, Serampore: [n.p.].
- Hofland, Mrs., 1828, *The Young Cadet, or, Henry Delamere's Voyage to India, His Travels in Hindostan, His account of the Burmese War, and the Wonders of Elora*, New-York: Orville A. Roorbach.
- Hunter, William, 1785, *A Concise Account of (the Climate, Produce, Trade, Government, Manners, and Customs of) the Kingdom of Pegu (interspersed with Remarks Moral and Political)*, Calcutta: John Hay.
- Hunter, William (Christoph Daniel Ebeling), 1787, *Kurze Nachricht von dem Königreiche Pegu dessen Klima, Erzeugnissen, Handel und Regierung, wie auch den Sitten und Gebräuchen der Einwohner : gesamlet auf einer dem Befehl der Ostindischen Kompanie zufolge unternommenen Seereise*, Hamburg: Bohn.
- Hunter, William, 1793, *Description du Pégu et de l'Isle de Céylan*, Paris: Chez Maradan.
- Judson, Ann Hasseltine, 1823, *An Account of the American Baptist Mission to the Burman Empire, in a Series of Letters, addressed to a Gentleman in London*, London: J. Butterworth & Son and T. Clark.
- Knowles, James D. (James Davis), 1830 (4th ed. --1829), *Memoir of Mrs. Ann H. Judson, Wife of the Rev. Adoniram Judson, Missionary to Burmah including a History of the American Baptist Mission in the Burman Empire*, London: G. Wightman.
- Malcolm, Howard, 1839, *Travels in South-Eastern Asia embracing Hindustan, Malaya, Siam, and China with Notices of Numerous Missionary Stations, and a Full Account of the Burman Empire*, 2vols, Boston: Gould, Kendall, and Lincoln; London: C. Tilt.
- Malcolm, Howard, 2004 (1839), *An Account of the Burman Empire with Notices of Missionary Stations*, New Delhi: Asian Educational Services.
- Malcolm, Howard, 1853 (10th American ed. 1839), *Travels in South-Eastern Asia embracing Hindustan, Malaya, Siam, and China with Notices of Numerous Missionary Stations, and a Full Account of the Burman Empire*, Philadelphia: American Baptist Publication Society.

- Marshall, John, 1830, *Narrative of the Naval Operations in Ava during the Burmese war, in the Years 1824, 1825, and 1826*, London: Longman, Rees, Orme, Brown and Green.
- Salmon, Thomas, 1727, *Modern History, or The Present State of all Nations describing their respective situations, persons, habits, buildings, manners, laws and customs, religion and policy, arts and sciences, trades, manufactures and husbandry, plants, animals and minerals*, vol.1, Dublin: George Grierson.
- Salmon, Th. (M. van Goch), 1729-1820, *Hedendaegsche historie, of tegenwoordige staet van alle volkeren*, vol. 3: Pegu, Ava, Arrakan, Acham, India, Mogol, Malabar, Kormandel, Ceilon, Amsterdam: Isaak Tirion.
- Salmon, Thomas, 1738 (1734), *Lo stato presente di tutti i paesi, e popoli del mondo naturale, politico, e morale*, vol. 4: De i regni del Pegu, o Ava, Arrakan, Acham o Asem : del vasto dominio del Gran Mogol, ch'è la vera India : dell' isole di Ceylan, e di Mala, Venezia: Presso Giovambatista Albrizzi.
- Salmon, Th. (G. van Goch), 1735-1736, *Die heutige Historie, oder der gegenwärtige Staat der königreiche Siam, Pegu und Arrakan, nebst allen, theils daran gräntzenden, theils darzu gehörigen Ländern von Tonquin und Cochinchina, bis an den Fluß Indus und das Reich des grossen Moguls*, Altona: Gebrüder Korten.
- Sangermano, Father, 1969 (5th ed., 1833), *A Description of the Burmese Empire compiled chiefly from Burmese (Native) Documents by the Rev. Father Sangermano and translated from his MS. by William Tandy, with a Preface and Note by John Jardine*, New York: A.M. Kelly (Rome: the Oriental Translation Fund of Great Britain and Ireland).
- Sangermano, Father, 1995 (1893), *The Burmese Empire a Hundred Years Ago, as described by Father Sangermano, with an Introduction and Notes by John Jardine*, Bangkok: White Orchid Press (Westminster: Archibald Constable and Co.)
- Snodgrass, Major (John James), 1827, *Narrative of the Burmese War, detailing the Operations of Major-General Sir Archibald Campbell's Army from its Llanding at Rangoon in May 1824, to the Conclusion of a Treaty of Peace at Yandaboo, in February 1826*, London: John Murray.
- Staunton, George Leonard, 1797, *An Authentic Account of an Embassy from the King of Great Britain to the Emperor of China*, 3 vols. London: G. Nichol.
- Stewart, M., 1826, *Some Considerations on the Policy of the Government of India, more especially with reference to the Invasion of Burmah*, Edinburgh: W. and C. Tait.
- Symes, Michael, 1969 (1800), *An Account of an Embassy to the Kingdom of Ava, sent by the Governor-General of India, in the year 1795*, Farnborough: Gregg International (London: W. Bulmer and Co. Cleveland-Row) 1vol.
- Symes, Michael, 1800 (2nd ed.), *An Account of an Embassy to the Kingdom of Ava, sent by the Governor-General of India, in the year 1795*, 3vols, London: Printed for J. Debrett, by Wilson and Co.
- Symes, Michael (J. Castéra), 2002 (1800), *Relation de l'ambassade anglaise, envoyée en 1795 dans le Royaume d'Ava, ou l'Empire des Birmans*, Genève: Olizane (Paris: Chez F. Buisson), 1vol. (4vols)
- Symes, Michael (Hager), 1801, *Gesandtschaftsreise nach dem Königreiche Ava, im Jahre 1795 auf Befehl des General-Gouverneurs von Ostindien: nebst einer Einleitung in die Geschichte von Ava, Pegu, Arracan, Beschreibung des Landes und Bemerkungen über die Verfassung, Sitten und Sprache der Birmanen*, Berlin : [s.n.]
- Symes, Michael, 1800-1804, *Reis van een Britsch gezantschap naar het koningrijk Ava*, 3vols, Rotterdam: B. Schuuring.

Symes, Michael (Giuseppe Carozzi), 1832 (1819), *Relazione dell'ambasciata inglese spedita nel 1795 nel regno d'Ava, o nell'impero dei Birmani*, 4vols, Napoli: A spese del Nuovo gabinetto letterario (Milano: Dalla Tipografia di G. Sonzogno,).

Symes, Michael (Samuel Lorentz Ödmann), 1805, *Resa till konungariket Ava, år 1795*, Stockholm: Nordström.

Symes, Michael, 1995 (1800), *Account of an Embassy to the Kingdom of Ava, sent by the Governor-General of India in the Year 1795*, New Delhi: AES.

Trant, Thomas Abercromby, 1827, *Two Years in Ava from May 1824, to May 1826, by an Officer on the Staff of the Quarter-Master-General's Department*, London: J. Murray.

Wayland, Francis, 1853, *A Memoir of the Life and Labors of the Rev. Adoniram Judson, D. D.*, 2vols, Boston: Phillips, Sampson.

White, W. Captain, 1827, *Political History of the Extraordinary Events which led to the Burmese War*, London: W. Sams.

Wilson, Horace Hayman (comp. & ed.), 1827, *Documents illustrative of the Burmese War with an Introductory Sketch of the Events of the War*, Calcutta: Government Gazette Press.

Yule, Henry, 1858, *A Narrative of the Mission sent by the Governor-General of India to the Court of Ava in 1855 with Notices of the Country, Government, and People*, London: Smith, Elder.

Yule, Henry, 1968 (1858), *A Narrative of the Mission to the Court of Ava in 1855, together with the Journal of Arthur Phayre, Envoy to the Court of Ava, and Additional Illustrations by Colesworthy Grant and Linnaeus Tripe; with an Introduction by Hugh Tinker*, Kuala Lumpur: Oxford University Press.

研究

Archer, Mildred (Patricia Kattenhorn), 1969-1994, *British Drawings in the India Office Library*, London: H.M.S.O. & British Library. 3 vols.

Archer, Mildred & Ronald Lightbown, 1982, *India Observed: India as viewed by British Artists, 1760-1860: An Exhibition organised by the Library of the Victoria and Albert Museum as Part of the Festival of India, 26 April-5 July 1982*, London: Victoria and Albert Museum.

Archer, Mildred, 1992, *Company Paintings: Indian Paintings of the British Period*, London: Victoria and Albert Museum.

Clement, Mark, 2013, "A Cross-Cultural Encounter in Pre-Colonial Burma: Henry Gouger's Narrative of Commerce and Captivity, 1822-26," *Journal of Burma Studies* 17-2: 335-371.

Hall, D.G.E., 1945, *Europe and Burma*, Oxford Univ. Press.

Herbert, Patricia M. (comp.), 1991, *Burma (World bibliographical series; v. 132)*, Oxford: Clio Press.

Htin Aung, 1965, *The Stricken Peacock, Anglo-Burmese Relations 1752-1948*. The Hague.

Keck, Stephen L., 2004, "Picturesque Burma: British Travel Writing 1890-1914," *Journal of Southeast Asian Studies* 35-3: 387-414.

Lach, Donald F., 1965-1993, *Asia in the Making of Europe*, 3vols in 9parts, Chicago: University of Chicago Press.

Prain, D, 1905, *A Sketch of the Life of Francis Hamilton (once Buchanan), sometime Superintendent of the Honourable Company's Botanic Garden, Calcutta*, Calcutta: Bengal Secretariat Press.

- Ramachandra, G.P., 1977, "Anglo-Burmese Relations, 1795-1826," Ph.D. diss., University of Hull.
- Saw Mra Aung, 2011, "The Accounts of Suvannabhumi from Various Literary Sources," *Suvannabhumi: Multi-Disciplinary Journal of Southeast Asian Studies* (Busan University of Foreign Studies, Korea), 3-1: 67-86.
- Sunait Chutintaranond, 1990, "Cakravartin: The Ideology of Traditional Warfare in Siam and Burma, 1548-1605," Ph.D. diss., Cornell University.
- Trager, Helen G., 1966, *Burma through Alien Eyes: Missionary Views of the Burmese in the Nineteenth Century*, Bombay: Asia Publishing House.
- 坪内良博 1980 「異民族支配と文化摩擦」 衛藤藩吉編『日本をめぐる文化摩擦』 弘文堂 : 79-91.
- 坪内良博 1984 「前植民地時代におけるビルマ王廷と英人使節の文化摩擦」 石井米雄編『差異の事件誌—植民地時代の異文化認識の相剋』 嶽南堂書店 : 19-67.
- 土屋健治 1991 『カルティニの風景』 めこん
- 土佐桂子 2014 「上座仏教社会における白象」 吉田ゆり子・八尾師誠・千葉敏之編『画像史料論：世界史の読み方』 東京外国语大学出版会:116-120.
- 渡辺佳成 2001 「コンバウン朝ビルマと「近代」世界」 斎藤照子編『岩波講座東南アジア史 5 東南アジア世界の再編』 岩波書店 : 129-160.
- 渡辺佳成 2003 「18-19世紀イギリスにとってのビルマ」『文化共生学研究』 1:153-168.
- Woodman, Dorothy, 1962, *The Making of Burma*. London.
- Yi Yi, Dr., 1985, "A Rare and Little Known Work on Burma," *Research in Burmese History* 5: 177-249.